地域新聞 みあき

第10号
地域新聞みあき製作委員会
令和元年9月1日　発行
連絡先 info.miaki@gmail.com

みあきに新たな名所出現か!?

モデル事業
実践編

いよいよ始動！レンコンファーム三秋

平成も残り10日ほどとなった、４月20日の三秋集会所。三秋地区住民をはじめ、県・市・えひめ地域政策研究センターの職員等、総勢21名が集まり、集会所隣の田んぼにて、「種レンコン植え付け会」が開催されました。

昨年度から実施している「集落活性化モデル構築事業」の一環で、２年目の今年度は実践編です。11月のレンコン収穫イベント用に用意した、約60キロの種レンコンを指定されたラインに沿って、代掻きされた田んぼに植え付けていきました。11月のイベントまでには、きっと大きく育っていることでしょう。（文責　原田浩明）

種レンコン植え付け会に参加された皆さん

祝〜花ハス鑑賞会

上手く植えれたかな･･･

「清らかな心」…何と美しい言葉でしょう、三秋の雰囲気にぴったりです。

これは、蓮の花言葉。池や湖などの泥水からすっと伸びて神々しいばかりの花が開く姿を表現しているそうです。いま、三秋集会所横の水田には、まさにその花蓮が華麗に咲き誇っています。

集落活性化モデル構築事業の１プロジェクトとして田んぼをレンコン圃場に改良し、４月に種レンコンを植え付けた成果が、今夏、花ハス開花として実現した。

８月４日（日）午前、ここで開催された花ハス鑑賞会。我々参加者はしばらくその美しい花弁に釘付けとなり、その後、田んぼの入口に「レンコンファーム三秋」の看板を設置。この看板、業者に発注したと思いきや、皆さんの手造りだそうな。「なぜ緑色？ロードバイクの絵？コーヒーカップ？」等々ツッコミ所があるのも一興。圃場整備から植え付け、看板に至るまで、全て手造りである事にこそ大きな価値がある。

私事ではあるが、かつての勤務地滋賀県には琵琶湖があり、その烏丸半島周辺には、国内最大級のハス群生地がある。「ここを通る度に友人と「この下には何年分のレンコンがあるんやろ？」と盛り上がった事を思い出す。一生レンコン食は勘弁して欲しいものの、素揚げ好きな二人であったが故の話題。

ようこそ三秋地区へ
レンコンファーム 三秋
Miaki

完成した案内板の前で記念撮影

満開のハスの花

そのレンコンが11月には食べられるかもしれないと聞き早くもワクワクしている。前哨戦として、看板設置のあと三秋集会所内で、三秋の食材を使った料理の数々を試食させて頂いた。実はこれも野菜を使った特産品開発という集落活性化プロジェクトの１つ。正直な感想…三秋女性部の力量は凄い。カレーコロッケ、かき揚げ、キッシュ、ちらし寿司、プリン等々。全てに三秋産食材がふんだんに使われていて美味。「三秋食堂」なんて作れば頻繁に通うのになぁ〜と。綺麗な空気と雄大な自然の中で、地元産食材を使った料理を満喫できる三秋食堂が脳裏をよぎる。ついでに三秋旅館も作ってしまいますか。近年は宿坊での精進料理も秘かなブームですし。あれっ、それならいいお寺がありますよね、曹洞宗の…。

花ハスから話しが飛躍してしまいましたが、レンコンは穴を通して先を見通すと言われる縁起物、三秋地区の未来を託すのにぴったりのテーマかも知れません。（文責　吉田克浩）

ほっこりかぼちゃのデザート

みあき産カボチャで作ったプリン

11月イベント開催決定！

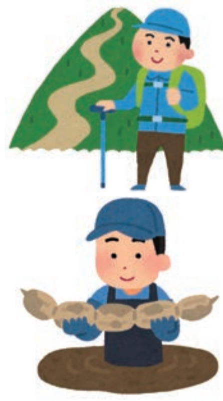
令和元年11月23日（土）勤労感謝の日に、イベントを開催します。詳細については、只今計画中ですが、現時点で分かっていることは次の通りです。

○イベント内容
レンコンの収穫体験及び試食会と明神山登山会

○場所
三秋集会所及び明神山とその周辺

○その他
三秋以外からの集客も予定
収穫体験と登山については人数制限あり

詳細については決まり次第、チラシや公式ツイッターにてお知らせする予定です。



みあき図書館

（文責・岡田有利子）

「松山周辺道後平野から望む山の楽しみ方30章」いせきこたろう　アトラス出版

近くのあの山に登ってみよう
松山周辺
道後平野から望む山の楽しみ方30章
アトラス地域文化新書
自然探訪・アウトドア
道後平野周辺のおなじみの35山をいせきこたろう氏が紹介
アトラス出版

単なる登山コースのガイド本ではない、地域を楽しむコツが、山歩きを通して詰め込まれた本である。例えば明神山の紹介では、祀られている降雨の神や三秋の遥拝所に降ろされた山頂の社、三秋の大池が記されている。山にまつわるあらゆるモノゴトが掲載されており、伝説や歴史・地形等からわかる名前の由来なども大変興味深い。この本を携えて山歩きをすると、体験と知識が重なり、いつも何気なく見ていた山が、そしてその地域が愛しくなる。ひいてはあなたの何気ない日常も楽しくなるかもしれない。

端の榊の大木

（文責・中藤真里）

ドンッとそびえ立つ大きな木。とても存在感のあるこの木は榊です。ここまで大きな榊は珍しく、知っている限り、伊予市では１番、もしかしたら、県内でもほかにないのでは？　私なりに調べてみたのですが、樹齢は３００年以上になるのではないかと思われます。代々、大野さん家で守られている大きな榊、近くで見ると、とても神秘的でした。

樹齢３００年の榊の木

大野さん（右）と一緒に

編　集　後　記

あおり運転の話題が連日報道されるようになって、ドライブレコーダーの重要性をひしひし感じる今日この頃です。皆さんの車は付けてます？残念ながら私はまだなんです･･･。あんな悪質ドライバーがいるのかと思うと、一刻も早く付けねばと思っております。ところで、次号の地域新聞みあきですが、「集落活性化モデル構築事業」を受けてる三秋以外の２地区（愛南町緑地区と松野町松野町蕨奥地区）にも寄稿して頂き、それぞれの地区が紙面一面に思いのたけを語って頂く、３地区合同号を発行する予定です。３地区全戸に配られる予定になっておりますので、お楽しみに。尚、今回の合同号発行に伴い、第１１号については、次の次の発行（翌年５月）になる予定です。　（ひろ）

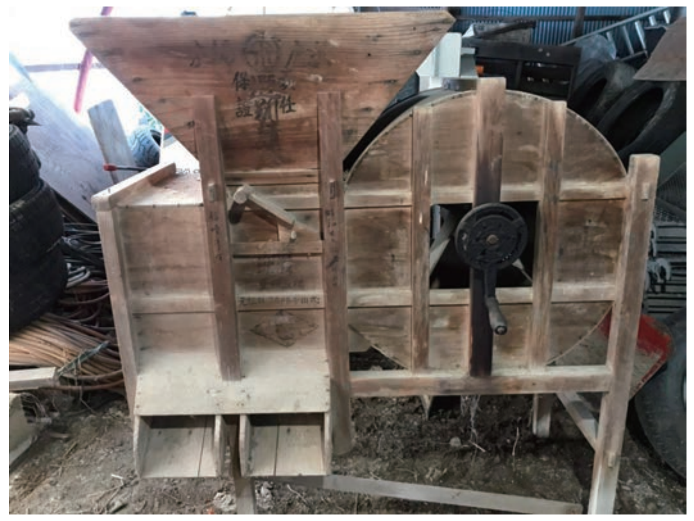
三秋の企業にズームイン!!

代表取締役にインタビュー　~有限会社イツワ工業　編~

Q.社長のお名前とお歳を教えて下さい。
濱田　忠昭　52歳
Q.創業はいつ？
１９９８年
Q.事業内容は？
ステンレス建具・ステンレス・スチール・アルミ　建築金物設計・施工
例えば、自動ドアの建具・手すり・建物の外壁パネル等
Q.事業規模と従業員は何名？
三秋地区内に工場３か所と事務所
従業員数13名　平均年齢40歳ぐらい
Q.三秋地区に事業所を置かれたのはいつから？
１９９９年に第１工場、そして現在の事務所は２０１６年から。
Q.三秋地区の感想は？
自然豊かで近隣住民の方がとても優しい。
Q.最近の業界の懸案事項・課題は？
若い人がなかなか入ってこないこと。
Q.今後の会社の予定は？
現在の工場が手狭になっているので近いうちに拡張する予定。
Q.住民の皆さんに一言
工場からの騒音で、近隣の皆さんにご迷惑をおかけしておりますが、今後とも宜しくお願い致します。

イツワ工業従業員の皆さん（事務所前にて）

読者プレゼントコーナー　~クイズこれってな~に？~



この写真（左）は民家の納屋に残っていた、現在は使用されていないある道具です。さて、この道具はいったい何でしょうか？道具の名前とその使用目的をお答えください。正解者の中から抽選で１名の方に記念品をプレゼントいたします。

応募方法

①クイズの答え（道具の名前とその使用目的）　②住所　③氏名　④年齢　⑤電話番号　⑥本紙の感想
を明記の上、郵便ハガキもしくはＥメールにてご応募ください。

宛先　〒799-3124　伊予市三秋甲２７１－２　地域新聞みあき事務局　宛
Ｅメール　info.miaki@gmail.com
応募締切　**2019年11月30日（土）必着**
当選発表　本紙第11号にて

※ご応募いただいた皆様の個人情報は事務局にて厳重に管理し、プレゼントの発送以外の目的では使用いたしません。

皆さんのお家に古い写真が眠っていませんか？昔の風景やお祭り事、三秋に関する昔の写真がございましたらご連絡ください。
また、その他の投稿・情報・写真も随時お待ちしております。★みあきの〇〇〇★
私の絶景　etc・・・
お近くの当新聞編集委員もしくは、メールにてご連絡下さい。

おしらせ

info.miaki@gmail.com

先進地域視察
～愛南町緑地区と静岡県賀茂郡松崎町～

（文責）　玉井　敬信

『まるごと緑』の活動について聞く（緑公民館にて）

ご存知の通り、昨年度より我が三秋が、県の集落活性化事業のモデル地区として指定して頂き、今日まで様々な活動をしてきました。この事業では、モデル地区として3地区が設定されたのですが、他の2地区の内、愛南町緑地区は、我々よりも早くから地域活性化の活動をされており、今回身近な先進地域として視察と情報交換を兼ねて、6月2日～3日に掛けて表敬訪問させて頂きました。まず、緑公民館にて、地域活性化団体『まるごと緑』の木村俊介・森裕之両氏から、「愛南の魅力体感ツアー」・「カニ獲りプロジェクト」等の体験プログラム、空き家を利用した「ジビエの解体処理所」の設置、団体の運営体制及びNPO法人化に向けての考えについて等幅広くご説明頂きました。一方、予定していた狩猟同行ツアーである「ジューガイツアー」は、雨天のため残念ながら実施出来ず、替わりに木村氏宅における鹿肉の解体見学をさせて頂きました。また、話し合いの中で、今後11月23日に三秋地区が開催するイベントにおいて、同地区団体も参加・協力していく事となりました。

鹿肉の解体見学（木村氏宅にて）

次に、「みあき明神山古道復活・再生プロジェクト」に関して、古道を復活・再生して、マウンテンバイク（MTB）ツアーとして活用されている、静岡県賀茂郡松崎町にある『(株)ベーストレス』へ、6月20～22日に掛けて訪問しました。そこで、同社が実施しているマウンテンバイクツアーへ参加すると共に、同ツアーの古道ルートにおける管理・整備・運営や、地権者との交渉及び今後の課題等について聞取り調査も実施しました。これにより、マウンテンバイクルートと登山道との違いはあれど、古道再生を実施するに当たっての注意点や、管理・整備・運営についての方法が判明し、今後のプロジェクトの指針として行っていく方向性が明確になりました。

松崎町の全景（MTB初心者コースより）

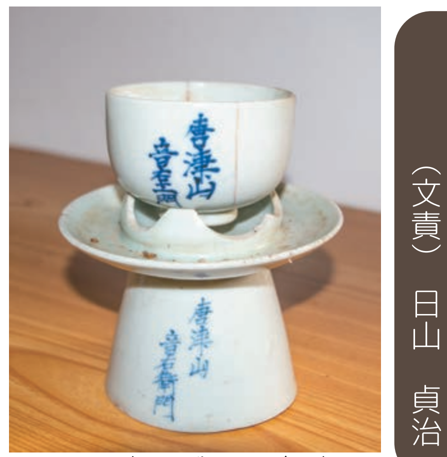
MTB古道コース上にて説明を受ける

今回の2地区への視察に関しては、愛南町緑地区については、今後の相互の様々な活動を協力していくことによる相乗効果を挙げる取り組みの約束、静岡県賀茂郡松崎町については、今後の「古道復活・再生プロジェクト」の方向性・指針の取得という、それぞれについて大きな成果を挙げることが出来たと思っています。これらの成果に従いつつ、11月23日のイベントに向けて着々と行動していきたいと思いますので、皆様のご協力を宜しくお願いいたします。

㈱ベーストレス事務所にて（壁や机の木は間伐材）

西願寺に奉納された「唐津山音右衛門」名の磁器

（文責）　日山　貞治


西願寺に残る三島焼

江戸時代の後半、文政元年（1818）に市場村の佐伯家から金岡音右衛門が窯を譲り受け三島町で始めたのが金岡窯の始まりです。その後、音右衛門は、幕末の頃長崎で「酸化コバルト」・青い絵付けの薬品を得てから、金岡窯の製品は面目を一新することができました。明治になって、亀造（二代）・定蔵（三代）が継承し、明治の中頃には製品は一段と進歩し、三島町の陶磁器が家庭用品として一般に重宝されるようになりました。

ちなみに、三島町では窯場のことを、唐津山（からつやま）と呼んでおり、江戸時代末期には、金岡窯は通称唐津山音右衛門の屋号で通っていました。皆さんの家庭にも、明治から大正にかけての三島焼の陶磁器が残っているかもしれません。探してみてはいかがですか。

参考文献　近藤英雄　著『伊予市三島陶磁器の歴史と風物詩』

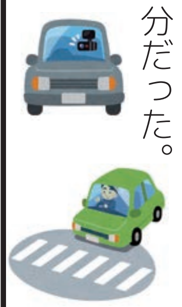
ドキュメント72分
～交通安全活動推進委員の活動に密着～

（文責）　原田　夏子

一日警察官委嘱式（折井さん右奥）

『みあきにこの人あり』（本紙第5号）でご紹介した、折井敬さんに密着。交通安全活動推進委員としてのある日の活動に同行した。

5月15日午前10時過ぎ、伊予警察署西側駐車場。伊予警察署長をはじめ、交通安全活動に関係する方々、そして、今年の五色姫に認定された5人の姫たち。この日、「五色姫一日警察官交通安全街頭キャンペーン」が行われ、折井さんも五色姫たちと共に、車のドライバーに交通安全啓発グッズを配りながら、安全運転を呼び掛けていた。毎年行われているこのイベント。折井さんたちのこうした啓発活動の積み重ねにより、地域の交通安全が保たれているのだと実感した72分だった。



知事！　質問です

（文責）　原田　浩明

中村知事と意見交換（東温市）

5月30日、東温市中央公民館にて、「知事とみんなの愛顔（えがお）でトーク」が開催されました。知事が地域に出かけ、地域住民と気軽に意見交換を行い、地域の意見・要望を把握し、可能なものから県政に反映させていくための会議で、今回は中予地区の各市町の代表が出席。筆者も伊予市の代表として出席しました。

最初に、県政に関する知事の講話あり、その後、各出席者よる、県への提言・意見の発表という流れで会議は進行。筆者も、現在、三秋地区が対象となっている「集落活性化モデル構築事業」について知事としてどのように考えているかを質問しました。知事からは、少子高齢化・人口減少は喫緊の課題であり、この事業の重要性を認識していると共に、移住促進に繋がる結果を期待するとの回答を頂きました。また、当日は、地域新聞みあきの最新号を知事に手渡し、三秋地区のアピールをしっかりとして参りました。

安全確認の大切さ

（文責）　原田　浩明

信号機のある交差点での左折

5月13日、北山崎小学校体育館にて自転車教室が開催されました。子供たちは、乗りなれた自分の自転車を学校まで持ってきて、伊予署や交通安全協会の方々より指導を受けながら、自転車の安全な乗り方や交通ルールについて、しっかりと学んでいました。

一時停止の標識ではしっかり止まろう

逆転サヨナラ本塁打！

（文責）　原田　浩明

北山崎体育会による地区対抗球技大会が6月7日～16日に開催され、卓球、グラウンドゴルフ、レクバレー、ソフトボール計4競技の熱い熱戦が繰り広げられました。我が三秋地区からも全競技にたくさんの方が出場され、卓球女子は準優勝、ソフトボールにおいては、決勝戦サヨナラ逆転2ランで、見事優勝という輝かしい成績を収めました。

卓球女子準優勝

サヨナラ本塁打でハイタッチ!

三秋チーム優勝（ソフトボール）

ホタル観賞会に参加して

（文責）　岡田　有利子

世界に一つだけの提灯を作る子供たち

初参加のホタル観賞会、地区外からの参加でありながら、大変あたたかく迎えて頂いたことに感謝している。世界に1つだけの自分で作成した提灯を持ち、ホタルを求めて歩いた道すがら。家族で、あるいは隣り合ったもの同士、さざめきながら進んでゆく。1人で参加した私自身も、地域の方から大池や三秋川、明神山、西願寺、ソテツ、レンコンの話、そして「地域新聞みあき」が生まれた経緯などを教えて頂いた。また、聞こえてきた会話の数々も心地よかった。「こっちにホタルがいたよ！」という子供達の元気な声、そして走る彼らを心配するお母さんの声、「どうしたのか、歩かんのか、しんどいんか」とお連れ合いを気遣う優しい声。両手内に閉じ込めたホタルをプレゼントするロマンチックな一幕も微笑ましい。そこには、地域新聞みあきの創刊号に書かれていたような、地域の老若男女が楽しめる「小さな何か」があった。大事なことは共有する時間の積み重ねである。これが無ければできない、ではなく、共有したいという思いがあれば地区行事はできると感じた。必要なことは特別な何かではなく、ささやかだけれども確かであたたかい地域の何気ないぬくもり、そしてそれを実現するためのアイデア・工夫・熱意ではないかと思う。しっかりとした地域の土台が、このホタル観賞会で作られている。この日の一コマを、大人も子供達もふとしたことで思い出すことだろう。

提灯を片手にホタルを探す

抽選会でみごと特賞をゲット!

夏の子どもキャンプ

（文責）　谷本　和之

キュウリの収穫体験

第12回わくわく体験キャンプを、令和元年8月17日、18日の2日間行いました。今年も昨年と同じ場所、西願寺での開催となりました。県内外から集まった子ども達16人、そしてスタッフとしてVYS一般会員や高校生会員19人の総勢35人で協力して行いました。さらにキャンプ地地元の三秋の方々の協力もあり、盛り沢山の内容になりました。

初日はまずクラフトとして発泡スチロールを使った絵葉書やフォトフレームを作って交流を深めました。夕食は昨年と同じくカレー作りと飯盒炊爨、夜にはキャンドルサービス、ナイトゲームをして大盛り上がり。夜も更けてからは肝試しもして夏の夜を楽しみました。

2日目はキャンプ地がお寺ということもあり、玉井和尚のご協力の元、座禅体験をさせていただきました。その後、オリエンテーリングと夏野菜の収穫体験を行いました。折井さんに先導して貰いながら畑まで歩きました。道中、地元三秋に関する問題など全12問を解き、時にはチェックポイントとして立ってくれていた地元の方（仙波さん、日山さん）にヒントをもらって楽しく歩きました。

畑到着後は、収穫する野菜であるキュウリについて、講師の吉岡さんのお話を聞き、知識を深めました。いざ収穫体験、今年は地元の原田さんの畑をお借りしました。大きく美味しそうに育ったキュウリをハサミで採る体験はなかなか経験できることではなく、新鮮な気持ちになりました。休憩時間には朝早く用意してくれてた美味しい朝どりキュウリを食べさせていただきました。よく食べる子は4本も美味しそうに食べていました。

お昼にはピザ窯を用意し、講師の河内さんの指導の元、ピザ作り体験と試食をしました。熱々を食べることができ、子ども達は口々に美味しい！と言っていました。お別れの時にはまた来年も行きたい！とか、絶対行くからなど嬉しい言葉を子ども達から聞かせてもらい、良いキャンプにすることができたんだと実感しました。

冷やしキュウリの試食